暮らしのぞき箱

季節を知ったら
暮らしが楽しくなった

〜第二五七号〜

処暑（しょしょ）　八月二十三日

花火

暑さもそろそろ収まるという処暑。

今年の夏は、いくつもの花火を見ました。花火は、火薬類を取り扱うため、法律上は「煙火」と記します。観賞用だけでなく、信号用などの加工品も含まれているのです。日本へは、鉄砲伝来の際に火薬の配合が伝わったとされ、江戸時代に盛んになりました。

花火は華やかで、気分を高揚させます。けれど、どこかもの悲しさを感じるのは、かつて盆行事と一体と考えられてきたからでしょうか。歳時記でも江戸時代は、「送り火」とともに秋に分類していました。鬼ケ城の大仕掛けで知られる熊野大花火大会、明和町の大淀花火大会などは今も、初盆の故人を供養するため、その子どもや親戚が花火を打ち上げます。夜空に揚がる花火は亡き人を送る火でもあったのです。

七月二十八日に行われた「鳥羽みなとまつり」も盛大に花火が打ち上げられました。じつはこの祭りは、金刀比羅宮（ことひらぐう）鳥羽分社の例大祭で、この日、御神体を樋の山の頂にある社殿から、マリンターミナルの御旅所（おたびしょ）にお遷（うつ）しし、そのあと船で鳥羽湾を回る海上渡御（とぎょ）を執り行うのです。一般的には御神体を神輿（みこし）にお遷しし、氏子地区を練るのですが、ここではさらに海を練るわけです。昭和三十一年に四国の金刀比羅宮からご分霊（ぶんれい）（わけみたま）を迎えたときを再現しているそうです。この日の花火は、ご分霊を迎え、鳥羽分社の創建を祝うものであったのです。

鳥羽では、今月二十八日まで毎日夜八時半頃に花火を揚げる「鳥羽湾毎夜連続花火」を行っています。毎夜、花火の音が響く鳥羽の海辺。今では納涼が中心となり、歳時記では花火は夏の季語に分類されるように。人々のとらえ方によって、季語も動くのです。

文　千種清美

伊勢内宮前
おかげ横丁